

## 教材活用シリーズ 第80回

☆日図協加盟出版社の発行している教材について、実際の授業における活用例、より効果を得られるポイント(場面・方法)などをご紹介します。

縄文人はすごいね!

—デジタル教材と実物史料を使って—

(株)日本標準

『社会科資料集』

- デジタル版資料集『しゃかロム』 -



ふじた やすお  
藤田 康郎

(学校法人和光学園 和光小学校教諭)

東北大学生協同組合職員、宮城県仙台市立加茂小学校臨時教員を経て、現職。日本教育方法学会、歴史教育者協議会、日韓教育実践研究会などの研究団体に所属。著書に『死を通して生を考える教育(川島書店)』『和光小学校の総合学習 いのち・平和・障害を考える(民衆社)』を共著。

### 1. はじめに

子どもは実際に体(五感)を通して感じるこ  
とが大切であると考えています。資料による文  
字や写真だけの学習と比べて体験的な学習(ア  
クティブラーニング)では、子どもがより主体  
的に問いをもったり、継続して学びたいという  
意欲をもつことになると考えています。縄文時  
代の人々の生活は現代の生活と異なることは  
かりで、子どもにとつてその時代の人たちはど  
んな暮らしをしていたかを想像することには  
難しさがあります。それでも縄文時代を学ぶこ  
とで人間として同じだなと共感したり、その時  
代なりの人間の知恵と工夫に感心することが

面白さのひとつになっています。

### 2. どのように実践したか

私は実際に縄文時代のものや復元されたも  
のに触れさせるために、学校から電車と徒歩で  
40分ほどの所にある東京都立埋蔵文化財セン  
ター(東京都多摩市落合)に出かけることにし  
ました。事前の指導として『しゃかロム』を使  
いました。

『しゃかロム』の縄文時代「狩りと漁のくら  
し」を大型モニターに表示して使いました。子  
どもには「ここの人々はいったい何をしていた  
のだろうか?」と大雑把な質問を投げかけまし



- ◆小学5・6年用(A4変形判、4C)
- 『しゃかロム』は6年教師用付き物です
- ◆学校納入定価 600円

た。すると「貝殻を捨てている」「何かを作っ  
ている」「それは土器だよ」「海から貝を運ん  
でいる」など気がついたことがポンポン出てき  
ました。子どもは「ここだよ」と見つけたもの  
場所を画面を指さすことで示しました。子ども  
たちの視点が海に移ったとたんに別の子が「船  
で何かをとっている」「あつ丸木舟だ」と漁を  
している絵に集中していました。これは資料集  
やプリントだけを使う場合よりも効果的です。  
また、資料集なら子どもたちに「何ページの上  
の方の絵のなかのどのあたり」と注目させたい  
部分の位置を示すことになりました。すると「ど  
こ? どこ?」となかなか見つけれられない子ど  
もがどうしても出てしまい、クラス全体で同じ  
ものを見るまでには時間がかかってしまいま  
す。

土器の映像を取り出して表面を拡大すると  
縄目の模様がはっきり見えました。『しゃかロ  
ム』は拡大・縮小が簡単に操作できるので、さ  
まざまな部分を拡大して見せました。続いて



▲『しゃかロム』の拡大資料を使って「狩りと漁のくらし(縄文)」を見て気づきを発表

実際に青森で出土した縄文土器のかけらを取り出しました。子どもたちはギザギザになっている縄目の模様の部分を指で触って確かめていました。「すごい! 本物なんだ」とか「柔らかくないよ、硬いよ」という声も出しました。粘土で沖縄の守り神シーサーを作った時のことを思い出していたようです。粘土に縄を押し付けて模様をつくと聞いたために粘土の柔らかさを思い出したのでしょうか。面白かったのは土器の裏側も触って「なめらかだ」「なんか黒くなっている」ということを見つけたことです。子どもは実物を見せるとその一部だけ、表面だけでなく全体をとらえようとします。また縄目以外の模様を見つけて「これは縄で付けた模様じゃないね」と新しい発見もしていました。子どもたちは実物を見たことで、『しゃかロム』の画面のなかの拡大・縮小させたさまざまな画像やいろいろな形の土器に興味をもつ

たようです。

土器の発明によって焼くだけがせいぜいだった石器時代の料理と比べると、縄文時代の料理は比べものにならないくらいレパートリーが広がったのではないかという話をしました。

また、縄文時代の食べ物の絵を見せ、猪の捕まえ方を考えさせました。それは文化財センターに猪を捕まえる落とし穴の实物大模型があるため事前にその仕組みを考えさせたからでした。穴の中に先の尖っていない棒が何本も埋め込まれていたのです。しかし、子どもにはその仕組みは謎のまま文化財センターへ連れて行けばよかったと反省しました。教師は知っていることをついしゃべりたくなるもので、このような失敗はこれまでも何度も経験してきたのにと悔やまれました。

文化財センターでは、子どもたちは復元された竪穴住居の大きさに驚いていました。「こんな難しい形の建物をどうやって作ったのかな?」とか「なかの床は濡れていない、すごい!」と、あいにくの雨でしたが、かやぶきの屋根が雨を通さないこと、室内の温度は外気温よりも8度近くも高いことにも感激していました。

体験できる展示コーナーでは、石のすり鉢でドングリの中身を砕いてすりつぶしながら「この前見た写真のものと形は違う。すりつぶすのは難しいね」と話す子どももいました。すり鉢の縁があまり高くないので砕いた実が飛び散ってしまうのです。また、土器の表面に縄を押し付けたり転がしながら模様を付ける体験もしました。ある子は「縄を転がすだけではこ

の模様はできない」と学芸員の方に質問していました。その子は教室で見せた土器のかけらにも縄目の模様とは違う模様を見つけていました。学芸員の方から縄だけではなく、木の枝や竹串などの尖ったもので傷をつける場合もあると教えてもらっていました。

### 3. 実践の成果と今後の課題

これまでは何枚もの写真を用意して、黒板に貼り、子どもの疑問に対応しながら写真を貼り換えてきました。これが、『しゃかロム』を使うことで多くの写真を簡単にいくつも見せることができ、また、注目させたい箇所を拡大できるところが使いやすいと思います。一方で次から次へと子どもに見せたい写真や図を写しだすことも可能で、見せればそれでよしとする授業に陥ってしまう危険性も感じました。子どもに何を考えさせるのか? というのもっとも基本的な指導のねらいをもつことが大切であると感じました。



▲『しゃかロム』から実物史料へ本物の縄文土器に触れる子どもたち